

◎イラク過激派 宗教の極端解釈で支配か

【NHK News Web, 2014年6月24日】

<http://www3.nhk.or.jp/news/html/20140624/k10015456521000.html>

イラクでは、イスラム過激派組織が隣国シリアなどとの国境地帯で支配地域を拡大するなか、事実上制圧した北部の都市では、街なかにある歴史的な人物の像を相次いで破壊したことが明らかになり、イスラム教の極端な解釈に基づく支配を強めているもようです。

イスラム教スンニ派の過激派組織と政府軍との戦闘が続くイラクでは、過激派組織が隣国シリアやヨルダンとの国境地帯の複数の町を相次いで制圧するなどし、支配地域を拡大しています。

こうしたなかAFP通信は23日、過激派組織のメンバーが、事実上制圧した北部の第2の都市モスルで、詩人や音楽家などイラクの歴史的な人物の像を根こそぎ撤去して重機を使ってトラックに載せた様子の映像を配信し、偶像崇拝を厳しく禁じたことの表れとみられます。

またAFP通信によりますと、過激派組織は女性が肌を露出することを禁じるなど16項目にわたる法律を導入すると宣言したということで、イスラム教の極端な解釈に基づいて支配を強めているもようです。

イラクの政府軍は、過激派組織が制圧している主要都市の奪還に向けて大規模な軍事作戦を準備していますが、戦闘は長期化する様相を見せています。

混乱長期化で米のアジア重視に影響も

イラク駐在のアメリカ大使などを歴任したアメリカ政府の元高官は、イラクの混乱は長期化するという見方を示し、オバマ政権は今後、緊急性の高い中東問題を優先せざるをえず、アジア重視政策の実行に遅れが生じる可能性があるとして指摘しました。

イラク駐在のアメリカ大使や東アジア政策を担当する国務次官補などを歴任したクリストファー・ヒル氏はNHKのインタビューに答え、イラクでイスラム過激派組織と政府軍の戦闘が激しさを増していることについて「シーア派とスンニ派の対立は1300年間解決されておらず、その中でも今は非常に危険な時期を迎えている」と述べ、混乱が長期化するという見方を示しました。

そして、「イラクだけでなく中東問題全体が複雑になっている」と述べ、イラクの混乱が中東地域に広がる可能性を指摘しました。

そのうえでヒル氏は、オバマ大統領が打ち出したアジア重視政策について「アメリカにとってアジアは重要だが、中東問題の緊急性が高まっている。外交政策では将来の重要な問題

よりも緊急性の高い問題が優先される」と述べました。

オバマ大統領は、イラクとアフガニスタンでの2つの戦争を終結させるとともに、急速な軍備増強を進める中国を念頭にアジアを最も重視する政策を打ち出しましたが、ヒル氏の発言は、イラクの混乱がこうしたオバマ大統領の政策の実行に遅れが生じる可能性があることを指摘したものです。

☆関連するキーワード：アルカイダ系武装組織「イラク・シリア・イスラム国（ISIS）」、偶像破壊、アメリカの外交政策

一神教における戦争と平和（1）

——歴史的背景——

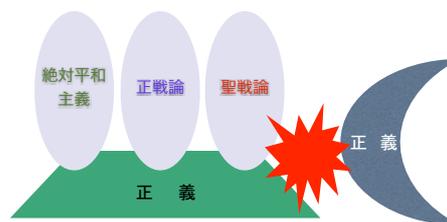
Overview

- 21世紀の戦争
- 戦争論の三類型
 - 絶対平和主義、正戦論、聖戦論
- 暴力の近代性
- ジハード理解の多様性
- 宗派対立の激化

21世紀の戦争

- 9. 11 テロ事件の衝撃
- 「テロに対する戦い」（war on terrorism）の影響、宗派対立の激化
- 直接的暴力の封じ込めだけでなく、**構造的暴力**（政治的・経済的・軍事的抑圧、貧困等）に対する中長期的な洞察が必要ではないか。
- ナショナリズムが引き起こす緊張関係
- 世俗的ナショナリズム：国家同士の覇権の衝突
- **宗教的ナショナリズム**：過激派によるトランスナショナルな武力闘争

戦争論の三類型



イスラエルの歴史（ヘブライ語聖書）

- 戦争は「主の戦い」（サムエル記上18:17）と呼ばれた。
- 「あなたの意のままにあしらせ、あなたが彼らを撃つときは、彼らを必ず滅ぼし尽くさねばならない。彼らと協定を結んではならず、彼らを憐れんではならない」（申命記7:2）。
- 「彼らは、男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅ぼし尽くした」（ヨシュア記6:21）。
- 「このように、主よ、あなたの敵がことごとく滅び、主を愛するものが日の出の勢いを得ますように」（士師記5:31）。

絶対平和主義 (pacifism)

- 「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」（「マタイによる福音書」5:38-39）
- 「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」（「マタイによる福音書」5:43-45）

アガペーの中の暴力性

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」

(「マタイによる福音書」10:34-37)

平和主義から正戦論へ

- 「コンスタンティヌス体制」(313年、ミラノ勅令)以降、絶対平和主義の考え方は、徐々に主流から傍流へと移行していく。
- アウグスティヌスが正戦論の基礎を築く。
- 絶対平和主義は、ワルド派、カタリ派、メノナイト、クェーカーなどの少数派を通じて受け継がれていく。

正戦論 (just war theory)

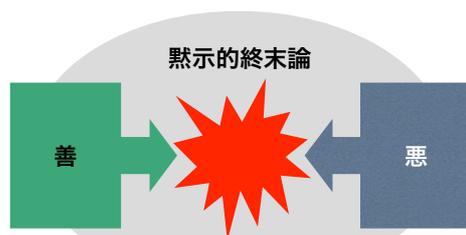
戦争への正義 (*ius ad bellum*)

- (a) 正当な理由
- (b) 正当な権威
- (c) 比例性 (結果として得られる善が戦争という手段の悪にまさる)
- (d) 最終手段
- (e) 成功への合理的見込み
- (f) 動機の正しさ

戦争における正義 (*ius in bello*)

- (a) 区別の原則 (戦闘員と非戦闘員を区別する)
- (b) 比例性の原則 (なされた不正を正すのに必要以上の力を行使しない)

聖戦論 (crusade, holy war)



十字軍 (1095~1270年、8回の遠征)

- ウルバヌス二世のクレルモン会議での演説(1095年)「かくて互いの間に平和を保つことを約したおん身らは、東方の兄弟たち、神に背く呪われた種族の脅威にさらされている兄弟たちを、救う義務を負っているのである」。
- ウルバヌス二世による十字軍の呼びかけには、異教徒によって「汚染」された聖地を「浄化」しなければならない、という主張があった。また、人々の間には世界の終末が近い、という期待があった。

暴力の近代性

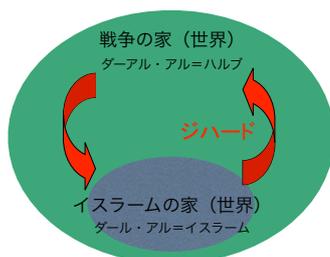
- 近代は暴力を克服できたのか?
- 「憎悪」ではなく「無関心」により起動する暴力のシステム
- 反ユダヤ感情(憎悪)とホロコーストの違い
- 【参考】ジークムント・バウマン『近代とホロコースト』大月書店、2006年。
- 生命の序列化——科学の名のもとに
- 優生学(→人種優性政策)

ジハード理解の多様性

- 大ジハード：自我との戦い。小ジハード：異教徒との戦い。
- フランク軍（第2回十字軍）への対応の中で、それまで廃れていたジハード思想がよみがえる。ヌールッディーン（ザンギー朝第2代君主、在位1146-74）は、中東イスラーム世界の再統一を目指し、ジハードを宣言した。
- ただし、ジハードの解釈は一義的ではない。

防衛的ジハード

- 「イスラームの家」を異教徒の侵略から守る防衛的な戦い。
→ 正戦論
- 「汝らに戦いを挑む者があれば、アッラーの道において堂々とこれを迎え撃つがよい。だがこちらから不義をし掛けてはならぬぞ。アッラーは不義をなす者どもをお好きにならぬ」(Q2:191)。



攻撃的ジハード（革命のジハード）

- イスラーム世界の浄化と境界の再設定を目指す。→ 聖戦論
- 思想的特徴：善と悪の存在論的二元論の立場。無差別攻撃をも容認し得る絶対的な目的。ジハードの戦死者には殉教者として楽園（天国）が約束されるという終末論（来世観）。
- 自国内におけるジハード（「近い敵」に対して）：腐敗した政治体制の打倒を目的とする。例：エジプトのジハード団によるサダト大統領暗殺（1981年）。
- 国際社会におけるジハード（「遠い敵」に対して）：イスラーム世界に対する敵対勢力（主としてアメリカ）の打倒を目的とする。グローバル・テロリズムの源泉の一つとなる。例：アルカイダ等によるテロ活動（9・11が転換点となった）

宗派对立の激化

- スンナ派とシーア派の対立の背景
- イスラーム復興と連動した宗派意識の高まり
- シーア派
 - イラン（国民の九割）、イラク（六割）、シリア（15%、シーア派の分派のアラウィー派が政権維持）
- 対立の原因は宗派的な感情の対立ではない。社会的・経済的な問題が宗派問題に転化されている。
- 【参考】 小杉 泰 『9・11以降のイスラーム政治』 岩波書店、2014年。